

「父(と子)から出て、

父と子と共に礼拝され、

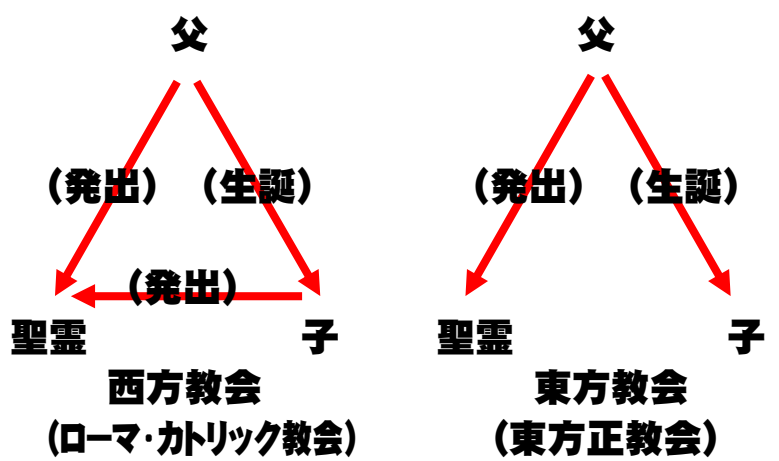
共に栄光を帰せられ、

預言者によって語られた」

(Ⅱコリント3・17～18)

一、「フィリオクエ」のちがひ

今回取り上げる文言は、聖霊は(父(と子)から出て、父と子と共に礼拝され、共に栄光を帰せられます。そして預言者によって語られました。)です。381年コンスタンティノポリス公会議で採択されたニカイア信条の文書はギリシア語で書かれたもので、聖霊は(父から出て)と書かれていました。ところが、西方教会が用いるために、ラテン語に訳した際に「と子」が入れられました。こうして、東方教会(東方正教会、ビザンチン教会とも言われる)と西方教会(ローマ・カトリック教会)との間で信仰の違いが生じ、それが1054年の、東西の教会が分裂した要因の一つになりました。この、括弧内に入っている「と子」が、ラテン語で「フィリオクエ」です。聖霊が父から出る(発出する)とする元来のニカイア信条と、聖霊が父と子から出る(発出する)とする西方教会の受け止め方とは、どのようにちがうのでしょうか。ここに図を用意しました。



御子は(世々に先立って父から生まれ)られました。そして聖霊は、元来のニカイア信条によれば(父から出)られました。西方教会の信仰では、聖霊は(父と子から出)られています。こうして、東方教会の信仰によれば、聖霊の役割はつきりします。一方で、西方教会の信仰によれば、聖霊は(父と子から出)ていますから、三位一体の統一性としてはきれいになります。聖霊の役割が小さくなります。父なる神と子なる神を語る役割が強くなるために、聖霊の影が薄くなってしまうわけです。

二、父と子と共に礼拝され

聖霊は(父と子と共に礼拝され、共に栄光を帰せられ)るお方です。聖霊はまことの神を指し示し、御子イエス・キリストを証しされます。コリント人への手紙第二3章17節、18節をご覧ください。(主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。)とあります。主、すなわち神は霊です。御霊は、父なる神の霊として働かれ、御子イエス・キリストの霊として働かれます。ですが、まちがわなないでください。おひとりなる神が、ある時は父として御自身を現し、ある時は御子として現し、ある時は聖霊として現しておられるのはありません。父・子・聖霊を混同しないようにされてください。こうして、御霊は、私たちに真理を諭し(詩篇119・130)、イエス・キリストの救いを証ししてください、御父と御子と共にあがめられるお方です。

三、預言者によって語られる

(そして預言者によって語られました)ですが、主語は何でしょうか。「聖霊」です。聖霊は旧約の時代から預言者

をとおして語られました。新約時代にも預言者は居ました。新約聖書という基準が定まるまでは、預言者の働きは重要であったと思われれます。聖書からも分かります。(エペソ2・20あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。)がそうです。教会が建て上げられるために、最も重要なのはキリストの証人であった使徒たちで、次が預言者でした。聖霊は人をとおして語られます。その場合の「人」とは、だれでもかまわないという意味ではありません。ペテロの手紙第二に、(1・21預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。)と書かれているからです。聖霊は、その人の中に入り、その人の人格をとおして語られます。イザヤにして然り、エレミヤにして然りです。

ではこんにち、聖霊はだれをとおして語られるのでしょうか。今は聖書という神のことがあり、神のことがばの中心がイエス・キリストの福音であることがつきりしている以上、イエス・キリストの福音を、聖書から解き明かす働きが、預言者に近いのではないかと考えています。すなわち、説教者の働きです。ただし、説教者もまちがいを語るべきではありません。会衆は説教者の説教を吟味する責任があります。